資源環境経済学特別演習II 議事録（　　6　月）

２０１１　年 度 第　　２　回

報告題名　畜産農家におけるエコフィード認証制度の意義-エコフィードの利用促進に関して-	
報告者　室井憲	日時　6月30日午後3時～
（所属分野）　農業経営経済学分野	場所　第2講義室
座長　堀まどか	議事録担当者　中村彰宏

出席者

長谷部、木谷、小山田、米倉、冬木、高篠、伊藤（房）、阿部（美）、韓、八木、神浦、水木、宮里、安部、易思、威廉、王（毓）、北村、金（喆）、滝田、タンボウニ、中村、堀、山口、林、泉井、Intan,Sudirman,Lies,金（銀）、渋谷、ナスンムンク、徐、趙、Manalo,劉、王（偉）、井坂、薄井、佐藤（洋）、庄司、西田、丸林

報告要旨

エコフィードとは、1.環境・生態、節約を意味するエコと飼料を意味するフィードを併せた造語である。2.食料循環資源を原料にして加工処理された飼料と同義である。

我が国の飼料自給率は23%であり、食品廃棄物量は年間2000万発生している。さらに、輸入飼料穀物は高騰している。これらの状況から、エコフィードは食品廃棄物の有効利用促進・飼料自給率の向上につながると期待されている。また、エコフィードには様々な問題がある一方で、エコフィードを上手に利用し成功を収めている事例が存在する。

現在、エコフィードを取り巻く様々な制度が作られているが、それらはエコフィードの促進にどのように役立っているのだろうか。本報告では、特に「エコフィード認証制度」が畜産農家にとってエコフィードを利用促進するのかということを明らかにしたいと考えている。

質疑・応答

丸林：エコフィードに関して、安全性を問題意識として挙げているが、エコフィードは元々食品残渣であり、場合によっては自分たちが食べていたものであるのだから、それらの安全性が確保されていないというのはどういうことなのか。

室井：外食産業やコンビニなどをイメージするとわかりやすいと思うが、川下にいくにつれて添加物等の異物が混入されることが問題となっている。それに対しての不安感が強い。

丸林：その添加物というのも自分たちが食べても問題のないものであるのだから、安全性は現状でも確保されているのではないか。

室井：そうかもしれません。調べておきます。

井坂：エコフィードはマーケットメカニズムを利用して従来の資源循環型の農業を実現するためのものだと感じたが、それに対して自給率向上や大規模化、ブランド化がメリットとして挙げられている。環境問題等に対する農家の意識はどうなっているのか。

室井：環境問題に関しては、廃棄物処理問題があるため、廃棄物の処理費用が年々高くなっている。また、本来ならばまだ食べられるものを捨てることに対してもったいないという意識があり、それを飼料として再利用する流れになっている。

劉：エコフィードとトウモロコシ等の輸入飼料ではどちらが安いのか。

室井：コストダウンに成功している農家としていない農家があるが、成功していない農家では輸入飼料の方が安い。

劉：では、どのようにして畜産農家がエコフィードを使うように説得するのか。

室井：ブランド化等が誘引になれば良いのだが、そのような先行研究にかんしては現在調査中です。

木谷：一方でブランド化の事例があり、一方では安全性の問題があるというのは矛盾しているのでは。そのようなマイナスイメージのある状中でどのようにブランド化をしているのか。

室井：ブランド化に成功した事例があるということはわかったが、それ以上はまだ調べていません。

木谷：成功事例では環境に配慮しているというような面をプラスイメージとしてアピール出来ているのではないかと思う。認証制度の効果を調べるよりも、このような面で考える方が良いのではないか。

長谷部：エコフィードという言葉はどのように造られたのか。

室井：日本の学界で造られた言葉のようです。

米倉：研究の目的や課題設定に関して、まだ切り口が見えていないが、どのような方向性で研究するのかは考えているのか。認証制度がきちんと組み立てられていれば本当に上手くいくのだろうかというのもポイントになるが、ネガティブなイメージを持たれているということやコストのことまで踏み込んだ研究をしてもらいたい。

長谷部：エコフィードの研究というのは、消費者側からの研究が多いのか。生産者側からの研究であるのならば、コストベネフィットがどうなっているのかをはっきりさせる必要があるが、そのような研究はすでにあるのか。

室井：コストベネフィットに関しての事例研究もある。コストダウンに成功している農家もあれば、失敗している農家もあるという結果になっている。

長谷部：では、いくつかの事例をサンプリングしてコストベネフィットを計算しなければならないのではないか。生産や流通、消費等の視点があるが、生産について研究するのならば必要になるとおもうのだが、それでは研究テーマにならないのか。

木谷：コストベネフィットに関しては、身近から食糧残渣を調達するためのネットワークの有無が大きいと思う。まずは、どういう所が成功しているのか、要因を調べる必要がある。